

# 日露戦争期に日本陸軍が戦況に応じて編集した野戦用地図とその資料 The Preparation of Maps for Field Operations by Japanese Army and Their Sources During the Russo-Japanese War

小林 茂（大阪大学・名誉教授）

KOBAYASH Shigeru (Professor Emeritus of Osaka University)

キーワード：中国，日露戦争，地図作製，露版地図，臨時測図部

Keywords : China, Russo-Japanese War, map making, reprints of Russian maps, provisional surveying unit

## I はじめに

外邦図として知られている多数の地形図は、台湾など植民地政府によるものを除くと、ほとんどが軍事用である。ただし実際の軍事行動では、戦況や局地的事情に応じて詳細な地図が作製された。そのなかには、現地の軍や師団が情報を集めて作成したものもあるが、前線に展開した部隊が偵察により作成した見取り図も少なくない（金2009参照）。この種の野戦用地図について、日露戦争の公刊戦史の編集にたずさわった瀧原三郎はつぎのように述べている。

参謀本部編纂の日露戦史の附圖は戦争當時使用せし地圖とは全然別物にて、今日の讀者にして當時我軍が此様な完全なる地圖を使用せしものと思ふたらば大變の間違ひである、予は日露戦史編纂當時永く之に従事し各戦場の地圖を戦争當時使用せしものと現に日露戦史に附屬せるものとを常に對照せし爲め、兩方の關係に付きては色々の事實を承知して居る（瀧原1928）。

つづいて瀧原は、日本軍が不十分な地理情報をもとに野戦を行った多くの興味深い例を示すが、同時に日本軍の情報収

集の水準を秘匿するためか、野戦で使用された地図は公表されないのが普通であったことも明確である。

このため、今日検討できる野戦用地図は多くない。終戦時に日本に持ち帰られたものが、アジア歴史資料センターから公開された場合や、所蔵者の遺族が手放して市場に出たものが多い。また後者は日露戦争では末期に作製されたものがほとんどである。したがってこれらの野戦用地図は例が少なく、作製時期やカバー範囲にかたよりのあることを承知しておく必要がある。

## II 初期の野戦用地図作製

日露戦争の初期に戦場となった遼東半島南部については、日清戦争時に臨時測図部により作製された「遼東半島五万分一圖」が利用された（第1図）。1895年制定の「遼東半島五万分一圖図式」によるもので、朝鮮半島や台湾での5万分1図の

作製にも適用された。ただしこのカバー範囲の北辺については、1904年5月1日の鴨緑江渡河作戦で戦死したロシア軍将校のもっていた8万4千分の1図を伸写した露版5万分1図が作製され、5月下旬に配布された（小林の昨年度発表）。

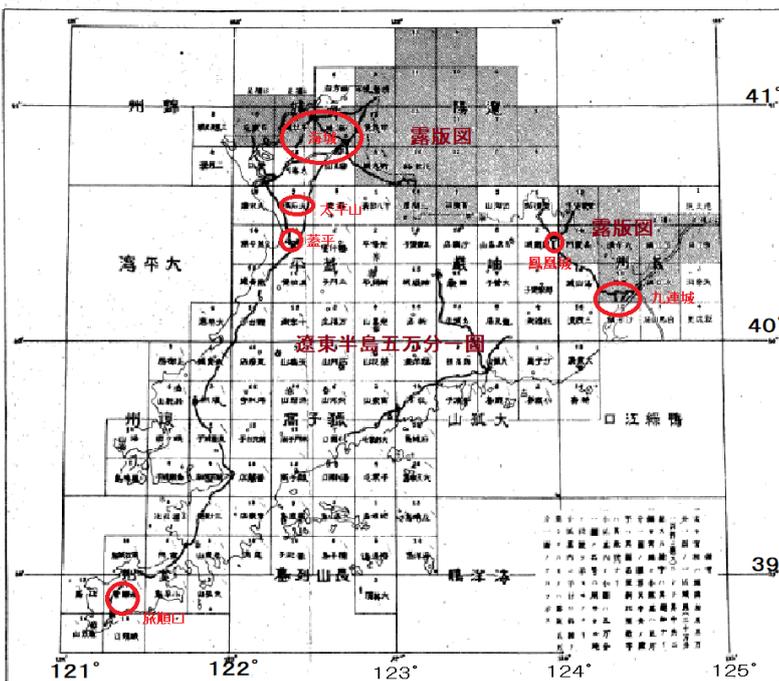
また6月中旬刊行の「東亞二十万分一圖」（義州・鳳凰城〔岫巖を改称〕・遼陽・海城、いずれも国立国会図書館蔵）では、この露版5万分の1図が利用された。

### 第1図：日露戦争期の「遼東半島五万分一圖」

北部のアミかけ部分はロシア製図（8万4千分の1）を伸写した5万分の1図  
朱の丸は日清戦争用に作製された2万分の1地形図（九連城近傍・鳳凰城近傍・太平山近傍・蓋平近傍・海城近傍・旅順近傍）の位置を示す（小林2021参照）

以上のような図の多くは、アジア歴史資料センターの小山史料で参照できる。旧蔵者の小山秋作（1862-1927）は日清・日露戦争期に多彩な活動を行った情報将校で、このコレクションには他に

表 覽 一 圖 一 分 万 五 島 半 東 遼

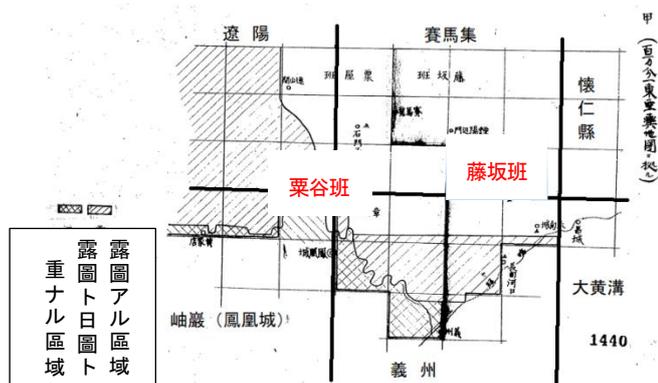


も外邦図関係の重要資料がある。

### Ⅲ 満洲軍總司令部の設置と遼陽会戦・奉天会戦

初期の地図は陸地測量部で製版印刷されたが、6月中旬になると「満洲軍總司令部」が設置され、野戦用の地図作製を行うようになった。初期の担当は陸地測量部の技術者と地図の出納にあたる雇員だけのようであるが、10月になると陸地測量手2名のほか数名の雇員も配置された。戦線が北上して遼陽会戦（1904年8月下旬～9月初旬）をむかえると、ロシア軍作製図への依存が高まり、業務が増大したからと考えられる。これと前後して、満洲軍總司令部傘下の軍にも陸地測量手など地図関係の技術者が配属されており、類似の課題があったことがうかがわれる（JACAR: C07082336300など）。

別に派遣された臨時測図部でもロシア製図の精度を高く評価し、それを「本邦式」に描きかえることとし、当面の測図範囲を、地図の未作成域としている（第2図）（JACAR: C06040404900）。なおロシア製図の地名のキリル文字表記の音訳は、各部隊配属の通訳が担当したと考えられる。



第2図：ロシア製図がカバーしない地域を主な対象とする臨時測図部の測量域（JACAR: C06040404900）

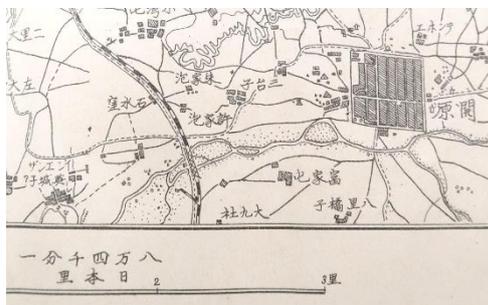
他方この時期に満洲軍總司令部で編集・印刷されたと考えられる「露版」図の現物や画像にまだ接することができない。各種の目録から、ロシア製図の縮尺を5万分の1や10万分の1に変更したものが作製されたことが推定されるが、以下では連続して変化が追える20万分の1の奉天図幅を検討する。

奉天は日露戦争初期から占領の対象と考えられていたが、当初は日清戦争期までに作製された空白部の多い④「清國二十万分一圖」があっただけで、まずそれに鉄道（東清鉄道南滿洲線）が描きこまれた（1903年以後作製，JACAR: C13010148500）。ついで登場するのが②1904年10月製版の東亞二十万分一圖（満洲軍總司令部刊，大阪大学蔵）で、北東部分に空白が残る。地名にはまだ一部でカタカナがめだつ。右下に「本二十万分一圖ハ露版十八万分一図ヲ基礎トシ目算測圖及軍ニ於テ蒐集セル諸圖ヲ参照」したと述べているが、この縮尺は、正しくは16万8千分の1と考えるべきである。こ

れに関連して1901年刊のロシア製奉天省行軍路図（16万8千分の1，アメリカ議会図書館蔵）の該当図幅（IV-5）を検討したが、この図よりは空白部が大きく、元図はもっと新しいものであろう。さらに③1905年1月になると、西側と南側の図郭を越えたところまで描かれた図（満洲軍總司令部刊，JACAR: C1311041700）が刊行され、「本圖ハ總司令部製十萬分一圖臨時測圖部測量五萬分一同二萬分一及本軍ニテ製シタル局部圖を輯集シテ調製」したと注記する。露版図による10万分の1図だけでなく、臨時測図部の成果も加える。またカタカナで記入された地名がなお散見する。さらに奉天会戦（1905年2月下旬～3月上旬）後の④1905年9月27日付の図（満洲軍總司令部刊，大阪大学蔵）で、同様に図郭の外側まで描かれる点は、やはり応急図であることを示す。

### Ⅳ 日露戦争終末期の露版図と20万分1図

日露戦争では、終末期になると膠着していた戦線が奉天北方地域に大きく移動する。その頃に刊行された露版図は縮尺を変えずに8万4千分の1のまま印刷され、北方に向かって広範な地域をカバーするにいたる（第3図）。また20万分の1図は長春や吉林までに達する（いずれも大阪大学蔵）。金（2009）が多数の手描き局地図を検討したのは、この地域の戦場を描くものである。ただし、臨時測図部の作業はこの地域にまで及び、その成果は公刊戦史に反映された。



第3図：1905年3月満洲軍總司令部製露版「開原」図幅 漢字に直せないカタカナ地名が散見する（大阪大学蔵）

### Ⅴ 日露戦争以後の外邦図作製

軍事行動に不可欠な地図は軍隊にとって基礎インフラであるが、その整備には長期間を要する。日露戦争の重要な戦場について、ロシア製図に大きく依存せざるを得なかった日本は、戦後も臨時測図部を解散せず、中国大陸各地で測量をつづけ、それは秘密測量へと変化する（小林2011:121-158）。この執拗な地図情報蓄積の背景は、東アジアにおける近代地図の整備の遅れだけでは説明できず、さらに検討を要する。  
謝辞 本研究はJSPS科研費20H01385によった。記して感謝したい。  
文献 金美英 2009。「日露戦争時の戦場で偵察用に作製・使用されたと推定される地図について」外邦図研究ニューズレター6: 9-46/小林茂2021。「日清戦争に際し戦史用に作製された2万分の1地形図」外邦図研究ニューズレター12: 71-80/瀧原三郎 1928。「地圖の利用と日露戦争に於て我が軍の利用せし圖」偕行社記事641: 93-99。